

教職大学院 NEWS

三重大学大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻

第17号 H31.3月発行



様々な校種で学ぶことに意義がある、附属校園実習!

本学教職大学院の教育実践力開発コース(学部新卒学生)において、1年次に実施する長期実習が「附属校園実習」です。この「附属校園実習」は、1年を4つの期間に分け、それぞれが「附属幼稚園」「附属小学校」「附属中学校」「附属特別支援学校」へ、期間ごとにローテーションで実習に行きます。様々な校種で実習を行うことにより、発達段階等の異なる教育を実際目で見て、肌で感じることで、幅広い経験を積むことを目的としています。

院生たちは、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校と校種の違いを体験することで、教育の意味を深く考え、子どもの実態に応じて工夫して指導する重要性に気づくことができました。また、子どもの見方や授業参観の視点などを学ぶことで、子どもの観察記録や教師の指導方法にも見方が大きく広がり、鋭くなってきました。このように、実習による院生の成長を随所に感じるようになりました。来年度の、1年間の連携協力校実習、10日間の東紀州実習に向けて、学んだことを整理し、さらに学修を進めていくことと思います。



院生の感想

一年を通して、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校と異校種実習をさせていただくことで、子どもひとりひとり姿をみとることの重要性を学びました。そのきっかけは、ある先生の「子どもは一人一人『個』性をもった一人一人の人格である。」という言葉です。『個』をみとる視点を持ち、授業や子どもたちと関わることで、同じ学年であっても一人一人の発達段階や『個』性が大きく異なることを実感できました。これまでの、子どもたち一人一人の姿をみとることができない自分に気づき、授業を観る際も教師の姿だけではなく、教師の支援による子どもたちの動きの変化をみとることが意識できるようになってきました。『個』をみとる視点を持ち、次年度の実習に臨みたいと思います。

教育実践力開発コース・稲垣 知大

幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校での実習を通して、子どもたちの実態を丁寧に把握しなければ、授業中の子どもたちの発言の意図が理解できないことを実感しました。特に「特別の教科 道徳」の授業においては、子どもたちの背景を知らないと価値にせまる効果的な問い返しができないことや、子どもたちの変容をみることができないことを知りました。また、幼稚園では生活体験をもとに保育が組み立てられており、幼児の気持ちに寄り添いながら支援する教師の姿が印象的でした。来年度の実習では、子どもたち一人一人の実態や背景を丁寧にみて、また幼稚園とのつながりを意識し、子どもたちの素直な思いが出るような授業ができるようにしたいです。

教育実践力開発コース・大下 竜平

私が附属実習の中で最も印象的だったのは、「無意識を意識に表出させる」という言葉です。この言葉は、ある先生が、授業の話聞きに行ったときに話して下さった言葉です。「教師にとってはとても興味深い・面白いと感じる子どもの発言も、子どもにとっては普通で当たり前のこととしか捉えていない場合が多い。だからこそ、『なぜそのように思いついたのか』、『発言のキーワードは何か』を問い直すことで子どもが『えっ！？』と思い、自分の考えを見つめ直すようになる。考えの根底にある部分こそ面白く、共有したいものである。」と、教えていただいた。小中学校の授業の様子においても、答えは分かっているが、答えについて説明することができないという場面が度々あり、正しい答えにばかりこだわる子どもの実態も感じました。以上のように、答えそのものではなく、答えまでの教科的思考に注目し、全体で追究していくことが必要であることを学びました。

教育実践力開発コース・渡辺 瑛大

附属実習で学んだことは、できないことから始まる意欲です。できない、わからないと感じることから、できるようにになりたい、わかりたいと感じるようになります。そこが学びへの意欲の出発点になっていました。これは、どの校種でも共通していました。そして、そのできないを放置せず、できるようにする手立てとして、視覚支援がありました。答えを示すのではなく、視覚から得た情報をヒントに答えに到達するように支援していました。このように言うのは簡単ですが、実際にやることの難しさも感じました。大切さを理解したその先まで考えなければ意味がないことを知りました。

教育実践力開発コース・松葉 憲彦

幼・小・中・特支の4校種において、子どもたちが抱える問題、授業中に持つ問いに注目して実習を行いました。小学校や中学校は、授業内外で子どもが会うモノ・コト・ヒトによって、生まれてくる問いに違いが現れることを学びました。どのような出会いを創出するか、またその問いを拾っていかに授業展開をするか、そこに教師としての力量が試されるのだと感じました。幼稚園や特別支援学校では、発達段階によって子どもが抱える問題に違いが現れることを目の当たりにして、子ども一人ひとりを“みる”ことの大切さを改めて感じました。「人生は問題解決の繰り返し」、そんな言葉が思い起こされる実習でした。お世話になった全ての方に感謝しています。ありがとうございました。

教育実践力開発コース・松葉 光平

附属学校実習では、様々なことを学びました。その中で特に学んだことが二つあります。一つ目は、誰にでも優しい支援や配慮という視点です。特に、特別支援学校実習でその考えが深まりました。間違えても安心・安全な学級づくりや情報を整理・分類し、考えを助ける思考ツールの活用、UDを意識した授業プリントを制作など、現在の自分の取組に繋がっています。二つ目は、児童生徒の成長の過程の変化です。幼稚園から中学校までの児童生徒を見ていくと、自分以外の人との関わり方が変化していくことや、学年が上がるにつれて発言回数が減っていくことが分かりました。このことは、全員が参加し、考える授業作りを行うという、自分のめざす授業作りに繋がっています。4月から連携校実習が始まります。今回の実習で学んだことをいかし、取り組んでいきたいと思えます。

教育実践力開発コース・長谷川 雄也

編集・発行 三重大学大学院教育学研究科 教職実践高度化専攻（教職大学院）広報担当

☎ 059-231-9319（学務担当）

〒 514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

URL <http://mkd.edu.mie-u.ac.jp> (教職大学院専用 HP)



info-mkd@edu.mie-u.ac.jp